

# 痔エンド？ (下)

## ——ぼくの闘「痔」6日間

西川伸一  
Nishikawa Shin'ichi

二月二日(月) 自爆エッセイを思いつく

四時半ごろ目が覚めてしまう。肛門の機能を早く戻したい一心でバスにお湯を張る。入院中は朝晩二回入浴しよう。ベッドでまたまどろむ。七時半に看護師のTさんがやってきて検温と血圧・脈拍測定。前日の排便回数と量、形状をきかれる。手術後やや微熱があったが、もう平熱に戻った。八時に化膿止めの点滴。九時に

朝食。入院四日目となり食事の雰囲気にも慣れてくる。そして、わずか五、六人の患者の間にも入院順序列とでもよぶべき序列があることがわかってくる。会話の主導権はおおむねその序列によって支配される。ここでもキャリアがものをいうのだ。

肛門科の場合、入院期間はせいぜい六日から一〇日くらいなので、入院患者の「回転」が早く序列が上がるのも早い。四日目ともなれば、もはや食堂ではわたしは中堅クラスである。入院初日は会話に加われなかったのが、こちらから話題を振ったり、他の患者にお茶を注いであげたりと余裕も出てきた。食後のおしゃべりをもっと楽しみたいのだが、またいつ便意に襲われるかわからない。頃合いを見て自室に引き上げる。するとすぐに案の定おいでなすった。少し固まっていたような気がする。数回の便通があり量も多い。きのう通常の食事を三食とったのだから当然か。

これで午前中の大仕事が終わったような気がする。意気揚々と四階の食堂に上がる。食堂のいすに置かれている円ざぶとんの上に腰を下ろし、缶コーヒーを片手に朝刊を読む。このときばかりは入院も悪くないと思ってしまう。けさの毎日新聞一面は、世論調査で菅内閣の支持率が一九%まで低下したという大見出し。こりゃもうだめだな。リビアではカダフィ打倒に立ち

上がった民衆に治安部隊が容赦なく発砲して、相当数の犠牲者が出ているという。うつつとした気分が帰室する。また尿が出そうでない。膀胱に全力をこめるのだが結局不発に。そうこうしているうちに昼食の一時となる。

食事の後、尿を出したくてベッドとトイレの間をうろろろしていると、妻から見舞いに来るといふ連絡が入る。職場が近いのでまもなくして到着。これまでの「楽しい」経験をまくしたて、ネットで仕入れた痔に関する知識を披露する。痔のことならそんなしょそこの医学部の学生より詳しいぞとばかりに。腰掛けて話しているうちに足を組みたくなるがそれができない。途中一度トイレに駆け込む。小一時間話して妻が帰る。

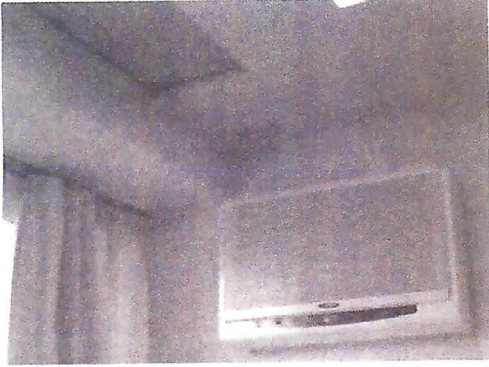
ふと、この得難い経験を公表したいと思いつく。人知れず痔に悩んでいる人はけっこう多いときく。わたしの入院記が少しでも参考になればうれしい。とはいえ二つ返事で載せてくれる媒体はあるか。本誌『プランB』に思い当たるまでさして時間はかからなかった。編集長にメールで相談すると、快諾してくれた。しめしめ。それにしても、裁判所研究といひ今回の闘「痔」記といい、自分は自爆ネタで原稿を稼いでいると自嘲の笑いを浮かべる。

五時半前に検温と血圧・脈拍測定。はじめてTさん以外の看護師さんが来室。六時前に診察。

あさって退院といわれ顔がほころぶ。喜び勇んで部屋に戻ると、掃除のおばさんがまじめな顔つきで入ってくる。

肛門からの出血やガスといっしょに出る便の飛沫を受けるために、尻の間にガーゼをはさんでいる。これが汚れたとき、部屋のゴミ箱にすてず、トイレの汚物入れに捨てなさいという注意だった。自分では気づかないがおいがするもので、見舞客も来るからと。部屋の天井にうるさいぐらいの大型の空気清浄機がついているのもそのためだったのか。手術直後癩に触るのもスイッチを切ってしまった。悪臭がこもっていたはずだ。妻は何も言っていなかったが、気を遣ったのだろう。この部屋は当然自分が退院したあと別の患者が使う。自分のことしか考えていなかったと反省する。

六時に夕食。退院が決まったことがうれしく



病室の空気清浄機。窓は開かない。

て、嫌いなチキン入りのシチューも完食する。最高裁判事だった藤田宙靖に似ているおじいさんもあさって退院だという。七時一五分ごろ入浴していると先生の声がある。なにか事態急変でもと気になる。しかしその後待てど暮らせど現れない。とうとう九時近くになり、またいつものTさんが検温と血圧・脈拍測定に。先生の来意を尋ねると、帰宅前に入院患者全員に声をかけるのだそうだ。個人経営の医院で入院患者を抱えることは、たいへんなことなのだ知る。

#### 二月二日(火) 排尿機能が回復する

四時半過ぎに起きて風呂を入れる。七時半にいつものTさんによる検温と血圧・脈拍測定。八時半に点滴。九時に朝食。あす退院となつて、食堂で思わず大きな声で「おはようす」とあいさつしている自分に気づく。単純なものだ。いい天気で窓から富士山が見える。一昨日の夕食時には無言だった人がよく話してくれる。きのうの手術がすんで気が晴れたのだろう。一方、右隣に座った三〇代のサラリーマンはきょう午前中に退院する。もうこんな病気で入院するのは二度とごめんですよと苦笑いしながらいう。それはそうだろう。術後の痛みもさることながら、大の大人が紙おむつをあてられ、毎朝、前日の便通の回数はもちろんその量や形状まできかれる。お大事にといつて別れる。おっと、

ぐずぐずしてはられない。また便意がきておむつを汚してしまう。

病室してしばらくすると奴さんがやってきて事なきを得る。数回便通があり。これで朝食の胃直腸反射は終わったはずだ。一〇時すぎにいそいと洗濯物をもって四階に上がる。ところが、女性患者三人がおしゃべりに花を咲かせていて、とても腰を落ち着けられそうにない。洗濯物をしかけて病室。四〇分ほどして、もういなくなつただろうとまた上がる。缶コーヒーをちびちびやりながら、新聞読みでくつろぐ。

一時に昼食。病室して排便。相変わらずどろどろしたものしか出ない。横になる。きのうはこれから尿が出ずにつらかったが、幸いなことにきょうは尿が格段に出やすくなる。久しぶりに立つて用が足せて、これでやっと男に戻れた気がした。

この入院中に、ジョージ・オーウェルのスペイン内戦従軍記である『カタロニア讃歌』を読み切ろうと持ってきた。だが、半分も読めていない。これだけは上げたいと寝ころがって活字を追う。

あつという間に夕方の検温と血圧・脈拍測定の時間となる。きのうの夕方と同じ看護師さん。五時半すぎに診察。あすの退院が確定する。六時に夕食。みなさんにそのことを告げる。自分より一日早く入っている患者さんからうらやま

しがられる。そして、きょう入院した高校生らしき若者が黙々とトーストをスープで流し込んで、すぐに席を立っていく。あすの手術がすんだら彼もおしゃべりになるだろう。夕食後しばらく、すっかり顔なじみとなった患者のみなさんと談笑。前号の最後に登場した痔瘻の手術を受けた人は、退院後すぐにイタリア出張が待っているそうだ。すごい勇気だなあ。帰室してまた便意。出血も多少ある。

その後、入浴して暖房のきいた部屋のベッドにころがる。ああ気持ちがいい。あと一泊か。もっといたいとは思わないが、なんだか去りたい。『カタロニア讃歌』の続きを読む。オーウェルが担ぎ込まれた野戦病院の様子を病院のベッドの上で読むと、想像力がかきたてられる。オーウェルの事実描写の迫力。勇ましい好戦論者は最前線の事実を知れ！ 就寝前の見回りにまたTさんが来室。

## 二月三日(水) ついに退院!

二時半に目が覚めてしまう。排尿。なんなく出る。もう大丈夫だ。四時半ごろ風呂を入れる。七時半前に検温と血圧・脈拍測定。結局ずっと同じTさんが朝の検温と就寝時の見回りだった。いつ寝ているのだろうと心配になる。

八時半前に化膿止めの点滴。終了後針の跡を押さえておいてくださいという注意を守らずに

いたら、そこから出血して指から血がしたたり落ちる。一瞬慌てる。油断大敵だ。退院といういいことがあると、きつとよからぬことが起こる。気を引き締めなければと言いつける。

九時に朝食。食べ終わってもみなさん先に席を立とうとしない。自分との別れを惜しんでくださっているようでとてもうれしかった。会話がはずんで、M先生は病院で三食とっているようだ。うだがうちに帰っているのか、看護師のTさんが朝晩と現れるが、彼女の勤務形態はどうなっているか、など。わたしと同じでやはりTさんの精勤ぶりをみなさん不思議に感じているようだ。名残惜しいが早く席を立たないと便通が来ってしまう。

食器を下げる際、給食のおばさんにもお世話になりましたとあいさつする。食事はみなとてもおいしかった。六日の入院で一一食を食べたが、すべて残さずに平らげた。大病院と違って、患者とのフェイス・トゥ・フェイスの関係がいいのだろう。食べる人の顔を思い浮かべてつくると、そうではないのでは、つくる意欲に差がつくかもしれない。

ほんとうに後ろ髪を引かれる。ネットのオフ会というのがあるが、元痔主会を開けば大いに盛り上がることだろう。そこまでは切り出せず、「電車で見かけたら声をかけてください」というのが精一杯。お世話になりましたとみなさん

にいつてお別れする。

帰室して排便。結局、便は固くならないままだ。退院の支度をする。紙おむつを捨て、久しぶりにパンツをはく。一〇時すぎに最後の診察によばれる。M先生が真剣なまなざしで、七〇〇人に一人ぐらいこの一カ月で大量出血するので、その間は遠出を控えるように。万一大量出血したら電話してすぐに来るようにとおっしゃる。ということは、先生はいつもスタンバイしているのか。旅行はおろか、深酒もできないではないか。個人経営の病院の苦勞をまた思いやる。たまたま、この先一カ月に遠出、外泊の予定がなくてよかった。これから一〇日間は禁酒であるともいわれる。軟便を告げると、通常の便になるまで一カ月はかかる由。

職人氣質のM先生といつもやさしくほほえんでくれたTさんに、心からお礼を述べて診察室を出る。

部屋に戻って入院費用の精算が済むのを待つ。前号で触れたアメリカ映画「ショーシャンクの空に」では、何十年と服役したのち仮釈放となった老人が娑婆の生活になじめず、アパートの自室の壁に「Brooks was here (ブルックスここにありき)」と彫って首つり自殺するシーンがある。自殺ではなく「痔」殺のあかしに、わたしも病室の壁に「Shin-ichi was here」と落書きして退院したい気分だった。

# プランB

第31号 2011.2.68P ¥840

NPO法人 日本針路研究所スタート!

歴史を進める「幻想の原動力」とプランB 村岡到

特集・転機に直面する労働組合活動

国鉄労働運動衰退の軌跡と再生への課題 亀高照夫

非正規労働者中心の東京総行動 佐藤和之

プランB 雇用制度の抜本的改革を 村岡到

私的利害優先の思想と労働組合 伊岡麻夫

インタビュール 国鉄労働運動60年 佐久間忠夫

新しい労働組合・労働運動の創造の視点 室政司

一一時前に受付によばれる。病室を出る前に軽くなんどか部屋にお辞儀をする。もう絶対にごめんだが貴重な経験ができた。視野も少しは広がったのではないかな。

費用の精算を終えて、出入り口で靴をはきかえていると、ついさつき応対してくれた受付の女性に声をかけられる。振り返ると、受付に領収書を忘れてあったという。思わず「危なかった!」と大きな声を出してしまう。吉田兼好の木登り名人の話はけだし名言だ。順調に運ぶと最後の最後に油断が出る。けさの出血で懲りたはずなのに。彼女に深く一礼する。医院の自動ドアをあけて、六日ぶりに「シャバ」に出る。まるで春の陽光。来たときの寒風がうそのよう。自分の肛門にも春が来たのだとほほえむ。はてさてこれにて持エンドとなりますやら。

## 退院して 克痔行為の日々

退院後、翌日の夜から仕事があった。排便をどれくらいがまんでできるか、まだまだ不安が残る。電車の中で便意を感じたら、駅のトイレまで耐えられるか。そこで意を決して、介護用の紙おむつを買うことにした。ドラッグストアでおむつとトイレに流せるおしりふきを買う。店員に老親の介護用だと思われる。そりゃそうだ。会計を済ませ、外に出て大笑い。おれがおむつをするのだ。

おむつをはき、かばんには換えのおむつとおしりふきを入れて出勤。週末までの三日間無事にとめられた。会議には円ざぶとん持参であった。職場のトイレにウォシュレットがあつて助かった。徐々に便も固くなり、二月が終わる週明けから便をこらえることに自信が出てきて、おむつはずしに成功する。だいたい、朝食の前後に二回排便があつて終わりだ。わが家にはウォシュレットがないので、シャワーで洗い流

すほかない。

困ったのは、夕食時にビールが飲めないと、一〇分ほどで食べ終わってしまうこと。家族との会話もはずまない。だがこれは時間が解決してくれる。おかげで肝臓が軽くなった気がした。

前号のはじめに述べたように、痔は血行障害である。血行をよくすることが予防につながる。こまめにスポーツジムにでも通えばいいのだろうが、そこまでする気にはなれない。「辛い」わたしの研究室は七階にある。地下鉄には階段が多い。わたしは国事行為ならぬ克痔行為と称して、エレベーターやエスカレーターを使わず階段を昇り降りすることにした。七階まで上がると軽く汗ばんでくる。血行が活発になるのを実感できる。階段に出くわすたびに、わたしは克痔行為に励んでいる。

(にしかわ・しんいち/明治大学教授)

日本労働弁護団の声明 水口洋介 憲法第28条を前面に 平岡厚

組合活動のなかの女性差別 宇山洋美

書評1・濱口桂一郎・著『新しい労働社会——雇用システムの再構築へ』 佐治義信

書評2・佐野章二・著『ビッグイシューの挑戦』 岩下雅裕

生存権フォーラムを創ろう! 小選挙区制廃止をめざす連絡会

劉曉波のノーベル平和賞受賞と中国民衆の動向 河内謙策

アンベードカルの生涯とタリット解放運動の現在 吉田秀則

蠅螂通信29 他山の石 私には敵はいない 最後の陳述 劉曉波

ベーシックインカムは生存権の手段ではない『ベーシックインカムで大転換』へのコメント 齊藤拓

村岡到『ベーシックインカムで大転換』を読了 馬場真骨

NPO 針路研